

インフレーションの終焉

一橋大学 清水啓典

2000 年以降世界のインフレーションは急速に終息して、現在 20%以上のインフレを経験しているのはジンバブエ 1 国のみで、10%台のインフレを経験している国も小国数カ国に過ぎない。事実上、世界経済の課題としてのインフレーションは消滅したと言ってよい。逆に、継続的なデフレーションを経験している国は日本のみである。物価は世界的に非常に安定した時代に入っている。

世界史的に見れば、インフレーションは 1 次世界大戦後の問題であり、世界各国が金本位制を離れて、管理通貨制度を導入して以来の課題であった。各国が貨幣供給量を自由にコントロール出来るようになってからインフレーションが生じ、1980 年代頃からマネーサプライ管理の重要性が認識され、世界の中央銀行が貨幣供給量を安定的に管理するようになって以来インフレは沈静化し、2000 年代になって旧社会主義諸国のインフレも終息したことから、世界的にインフレーションが消滅した。貨幣供給量の安定的供給による物価の安定という当然のことが現実に起こるまでに、1 世紀に近い時間が必要だったことになる。

その意味で、インフレーションの克服は社会主義の崩壊に匹敵する大きな経済的変革であり、それらは互いに密接な関係がある。この点はマクロ経済学や政策運営に関する根本的な考え方の変革と、国際化や世界の市場経済化の進展が関係している。なぜ現在、世界的に物価安定が実現されたのかという点、またそれが持つ経済的な意味を、経済学の発展の歴史を振り返りつつ検討してみたい。

その上で、今後インフレが再燃することはないのだろうか。その防止のためには、どのような政策や制度が必要なのだろうか。現在、日本ではデフレからの完全な脱却と、インフレ目標政策の導入の是非が話題となっている。インフレ目標政策は長いインフレとの戦いの歴史を踏まえた理論と制度面の発展の成果であり、現在の議論は若干視野が狭い面があるように思われる。日本は過去 30 年間、先進国中最も大きな物価変動を繰り返し、例外的に長い景気後退を経験してきた。デフレ脱却が展望される現在、新たな金融政策運営の目標が求められている。

本報告では、上記のような歴史的経緯をふまえて、今後の金融政策運営の在り方と制度的対応や課題について、インフレーションを巡って広い観点から検討する予定である。